

木與右衛門・中川平勝を將とし、馬廻一番組・二番組を編成して異變に處せしめんとした。然るにこの時文治既に久しく、士氣弛緩して居たから、僕隸の徒出陣を恐れ、仕を辭して郷に還るものすらあり、與右衛門もその任に適しなかつたと見え、同月廿八日之を免じ、金森嶺之助を以て代らしめた。嶺之助は碌千七百石を受ける者であつたが、性甚だ怯懦、亦自及して歿した。是を以て平勝獨り事に當つたが、五年三月齊廣の國の就くや、若し外寇の事起らば、親ら事を處すべしとなし、九月常備の警戒を解いた。

(二)文政の警戒—文政八年二月幕府は外國船打拂令を發し、諸國の航海者に對し、努めて異國船に遭遇せざる航路を擇ばしめ、又異國人と親和することなかるべきを嚴戒したが、加賀藩はその命を奉じて勝永を沿海諸藩に建設した。

(三)天保・嘉永の警戒—天保十四年幕府は諸侯に命じて海岸の防備を嚴にし、西洋兵式の練習を奨勵したから、加賀藩は八月廿九日津田正直を能登に派して警備の法を講ぜしめ、越えて嘉永元年八月八日には、齊泰自ら打木濱に大砲の發射を檢閲した。當時英米の船舶往々我が近海に來たが、能登の沖合でも亦船影を認めたといふものがあつた。固よりその確實は不明であるが、齊泰は豫め緩急に應ずるが爲、二年二月廿四日令を發し、若し外船の着陸するものあらば、直に銃手二組を發して警戒の任に當らしめ、然る後必要に應じて兵員を増すべきことを告げ、三年四月齊泰の江戸より歸るとき、亦越中の海岸を巡視し、

四日又能登に向かひ、廿五日歸城した。かくの如く藩が海防に意を注いだ際、六月米國の水師提督ペルリ來航の事があつたので、九月三日能登・越中沿海に成兵を配置し、十月六日老臣本多政通を越中に派して濱海を踏査せしめ、十一月初めて藩内に大砲を鑄造し、十二月銃炮鑄造場を河北郡鈴見村に設けた。

(四)安政以後—次いで安政元年三月十三日、奥村榮通を遣はして能登の沿海を巡視せしめ、四月十三日江戸より歸つた途次、越中魚津に於いて自ら成兵の演武を閲した。この月又領民の異國船を認めて注進するものあるとき、宿驛をして特に利便を興へしめる爲豫め飛脚札を海岸諸村に頒ち、八月横山隆淑を遣つて能登の海岸を成らしめ、又西洋陣法を演ぜしめる爲金澤に壯猶館を開いた。九月廿五日齊泰自ら鈴見の銃炮鑄造所・土清水の硝磺庫を巡視したが、幾くもなく加・能の領海を航行する一異船を認め、益外國に對して注意を怠るべからざるを痛感した。この異船の國籍は不明であつたが、藩は同月廿二日に關する事情を幕府の大目付柳生播磨守に申告した。文久二年十二月廿九日藩はまた越中の伏木及び放生津に成を置き、三年四月四日能登の鳳至・珠洲二郡に海防の兵を屯せしめた。

カイボウカタヌツキ 海防方主付 藩末外國船來航の頃より設けられた職で、年寄を以て之に補し、領國沿海の警備に主任した。

カイボコウカク 海保學鶴 藩は泉鶴、宇は萬和、青陵と號し、通稱を儀平といふ。父は尼崎侯青山氏の老臣角田市左衛門。泉鶴寶曆五年江戸に生まれ、幼より宇佐美清水の門に學んだ。天明八年父胤州侯に召され、

鶴亦之に従うたが、後仕を辭して青山侯の備となり、三十五歳より四方に遊び、五十歳越後に入り、文化二年夏途に杖を金澤に留め、その間越中を見、三年秋金澤より復京に上り、惟を下して教授し、十四年五月廿九日齡六十三を以て歿した。泉鶴商業經濟の學に深く、著す所多かつた。その中、海保儀平書及び或問は、泉鶴が加賀侯の侍臣の爲に述ぶる所を筆記したもの。東隱は、文化二年藩臣宮永權與へたるもの。綱目駁談は上京の後加賀藩の經濟に就き記したものである。泉鶴亦文章を能くし、書は張天錫の流を汲み、北宗の畫も描いた。詩に至つては絶句のみで諸體に及ばない。

カイホツ 開發 石川郡乙丸の内の小字。カイホツシヨウ 開發庄 康正二年造内裏段錢並國役引付に『一貫五百文鴨社領丹波國三和庄公文職並加州開發庄段錢。』とある。今能美郡上開發村・下開發村あるものは是であらう。

カイホツミヨウ 開發名 隆涼軒日録長祿三年九月廿八日の條に、加州永生寺領開發名のこと記されて居る。この開發名が、今の何れであるかは知り難い。

カイマイ 廻米 藩有の御藏米は、その必要とする額を貯藏し、殘餘を大坂に廻漕して賣却した。廻米とも、上せ米といふもの即ち是である。この大坂廻米は寛永十五年に初り、後一たび中絶したが、正保四年以降は常に行はれた。

カイモンジ 海門寺 鹿島郡大田に在つて、曹洞宗に屬する。山號は大龍山。能登名勝遊記に、『海門寺とて禪宗あり。寺領三十依也。昔は島山氏の菩提所にて、寺領三十石也。其寺代官の筋目の百姓に三郎太郎とてあり。此寺を海門寺と云ふことは前に島の端陸の端出合ひて、こなたよりは漸二三間に見えて、此寺の門とみゆる也。依て海門寺と號する由。』とある。

カイリクセワニツキ 海陸世話日記二冊。加賀吉崎浦の人長氏の著である。著者は造船を業とし、常に諸國に往來したが、寛文八年夏奥州南部海上に於いて難風に遭ひ、上陸の後土民の爲に積荷を奪はれた。因つて之を更に訴へたが得るところなく、遂に關東に至つて上訴し、又京都に行つて傳奏に申告した。本誓はもとこの一件を自書したものであるが、大聖寺の兒玉清信が淨書し、正徳二年の序を添へた。

カイレン 海蓮 海蓮は白山行者の徒である。法華經讀記に、沙門海蓮は越中の人。志法華讀記に在つたが、多年の功を積んで尙暗誦するを得なかつた。因つて深く肝膽に銘じて此の事を歎傷し、立山・白山その他の靈場に參向して祈禱し、難行苦行食を斷ち晝を斷つてその三品を誦したとある。この行者は村上天皇の天徳元年入滅したといはれる。

カウサカカケカズ 上坂景員 通稱平次兵衛。平兵衛の孫で、兩左衛門の子。寛政元年遺知三千石(内五百石與力知)を襲ぎ、定番火消・天徳院受取火消に歴任し、文化十年歿。

カウサカカゲヨリ 上坂景從 通稱平九郎。兩左衛門(二代)の次子。天明六年御田原御殿の

寶曆五年江戸に生まれ、幼より宇佐美清水の門に學んだ。天明八年父胤州侯に召され、鶴亦之に従うたが、後仕を辭して青山侯の備となり、三十五歳より四方に遊び、五十歳越後に入り、文化二年夏途に杖を金澤に留め、その間越中を見、三年秋金澤より復京に上り、惟を下して教授し、十四年五月廿九日齡六十三を以て歿した。泉鶴商業經濟の學に深く、著す所多かつた。その中、海保儀平書及び或問は、泉鶴が加賀侯の侍臣の爲に述ぶる所を筆記したもの。東隱は、文化二年藩臣宮永權與へたるもの。綱目駁談は上京の後加賀藩の經濟に就き記したものである。泉鶴亦文章を能くし、書は張天錫の流を汲み、北宗の畫も描いた。詩に至つては絶句のみで諸體に及ばない。